

## 平成 15 年度第 2 班活動報告

川 田 順 造

KAWADA Junzo

第 2 班が、実地調査に基づいてデータの資料化を分担する領域は、(a) 身体技法、(b) 感性、(c) 身体との関係での民具 である。初年度は研究期間も短く、研究態勢も十分に整っていなかったが、幸い班員はすべて、これらの領域について、すでに十分な研究の蓄積をもっていたため、第 2 年度以降への予備段階としては、十分に実りのある成果を挙げることができた。

身体技法については、川田が、この領域でのこれまでの日本、ヨーロッパ、西アフリカでの研究の蓄積に加えて、今年度のフランス（9～10 月）、西アフリカ（12 月）での調査で、いずれも短期間ではあったが、農具の使用、ブドウ酒の製造、楽器の演奏、川船の漕法、洗濯姿勢などについて、新しい資料を加えることができた。

廣田と山口も、すでに行ってきた研究である、日本と中国の民間芸能の文化的・社会的背景と、伝統芸能における身体の動きとについて、実地調査に基づく資料収集と、芸能における身体技法の記録・分析方法の検討を、共同研究員長瀬、梅野の協力を得て、日本（10 月）、中国（1 月）の現地研究によって行った。中国旧正月の追儺行事における鬼と翁の代表的演技を保存している石郵村では、実際に演者が家々をまわって行う演技や、追儺儀礼を観察記録し、今後のモーションキャプチャーによる資料化に向けて、一步を進めることができた。

感性の領域では、川田はフランスでの現地調査（9～10 月）によって、世界で最も精緻な方法を発達させてきたフランスのブドウ酒の鑑識における、色（視覚）、香り（嗅覚）、味（味覚）、口触り（触覚）、注ぐときの音（聴覚）における、それぞれの感覚の役割と言語表現について、および香水の発達史、原料とその調達歴史、匂いの文化史について、資料を収集し、知見を深めることができた。また西アフリカでの香料植物の種類と利用法について、現地での資料収集（12 月）を行った。

身体の使用との関係での民具の調査は、河野が従来の蓄積に加えて、新たな実地調査（8 月～1 月）によって、耕耘具、掬り臼をはじめとする農耕関連民具の精緻な比較研究を進めた。その成果は、日本人の作業姿勢の地域差、日本における稲作の系譜についても、新しい展望を開く可能性を与えるものである。河野の綿密な実証的研究からも明らかにされてきているように、民具は、それを見る者の問題意識に応じて、身体技法との関連以外にも、実に豊かな情報を提供してくれる第一級の非文字資料なのである。このことは、非文字資料による人類文化の多元的把握を目指す我々の COE プロジェクト全体にとって、強調し過ぎることがないと思われるくらい重要でありながら、従来十分に認識されていなかった点である。

川田も、フランス南部の石灰質・礫土地帯でのブドウ栽培とブドウ酒製造に用いられてきた民具を、その使用の身体技法との関連で（9～10 月）、西アフリカ（12 月）での伝統的楽器とその奏法の

身体技法について、および内陸河川での舟の漕具・漕法、洗濯法について民具と身体との関連において、従来の研究に新しい知見を加えることができた。

十分に練られた作業仮説と研究方法に基づいて、現地調査を行うことが不可欠の第2班の研究活動にとって、初年度の、予算的にも、それに伴って時間的にも、問題外の制約のなかで、なおかつこれだけの研究成果を挙げ得たのは、班員の努力と、それぞれの領域における、これまでの研究の蓄積の賜物である。初年度のこうした状況の反省に立って、第2年度以降は、非人間的な無理と過労を要求する現地調査予算の制限をゆるめ、より有効に予算を用いて所期の研究課題を遂行できるような全体計画を立てることが切に望まれる。